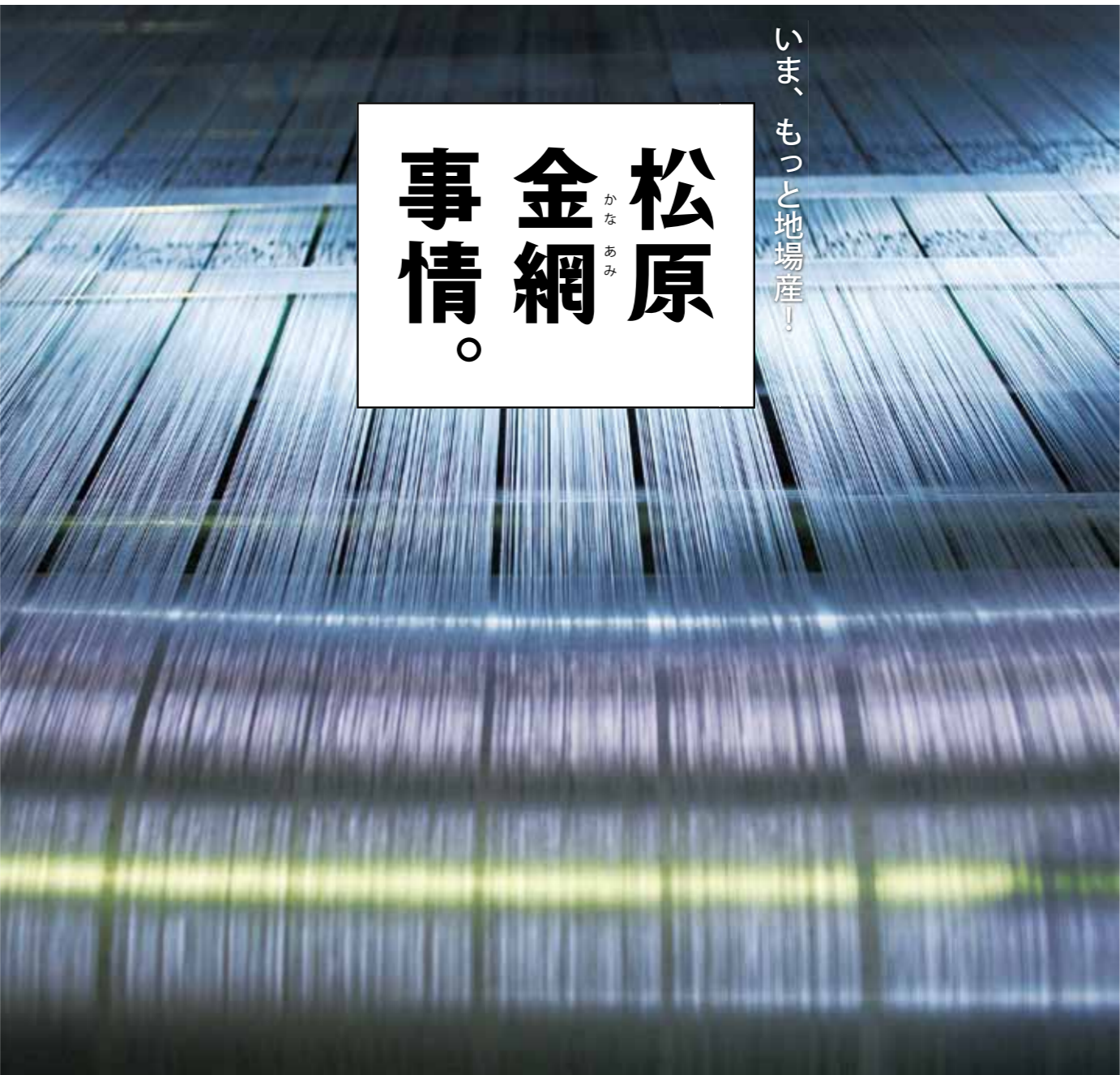


いま、もっと地場産！

松原 かなあみ 金網 事情。



交差する熱い思い！

今、何かと話題の「地場産」。松原にもたくさん「地場産」があるのを、皆さん知っていますか。広報まつばらでは、今後、市の「地場産」を特集していく予定です。

第1回目は、松原の地場産業の一つである「金網」です。

その歴史は古く、明治時代後半に河内木綿で培った手織技術をいかして生まれたといわれています。

金網といえば、何を思い浮かべますか？サルに茶こし、ふるいなどでしょうか。ひとりで金網といってもサルから「えっ！これも？」というものまで、さまざまあるのです。

そして、その金網に懸ける思いもさまざま。今回は、金網に対し、新しい挑戦をしている市内の2つの会社取材し、熱い思いと松原の金網の展望を語っていただきました。

問合せ 秘書広報課

☎334・1550代表

マツバラ金網株式会社

代表取締役 東田龍一郎さん

地場産業の「誇り」

うちは昭和9年に祖父が、36年に父が独立しました。初めは手織り機（左図）で、祖父の頃に動力織機を導入し始めました。

現在は、材料の仕入れから厳しい状態になっています。メイドインジャパンが無くなってきている。特に、中国はすごいです。工場は広く、機械は最新、人間はガムシヤラに向かってくる。そんな中で、どう日本の地場産業が生き残っていくのかが鍵になってくる。

地場産業がすごいのは、苦労の歴史があるところ。元々松原は、洪水が多かった。それに加え大和川の付け替えで、稲作のできない砂地が残ります。それを綿花の栽培に利用したが、海外の木綿産業に負けて衰退する。そこで金網が栄える訳です。



そこからもいろいろ

な危機があって、織り方を工夫したりしてきました。そうやって先人たちが、頑張ってきた。それは「誇り」だと思います。



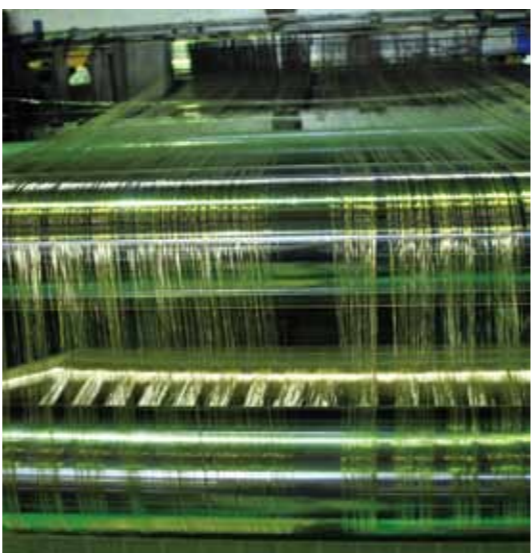
それと、身近な人が知恵を出して産業が生まれてきた。そこに息吹を感じるんですね。その息吹が、私たちの力の源になっているのです。そういうことを少しでも地元の人に知ってもらいたい。そんな思いから、金網といってもサルや茶こしだけではなく、デザインメッシュなどの特殊なものも作っているのです。

なぜデザインメッシュなのか

「普段役にたっているけど目に見えない金網を、もっと人目につくところに！」というのがきっかけです。あと、今まで誰も手を出していないところに製品を出したい。など。今度、市役所に掲げるもの（下図）もそうです。



↑ 7月22日(火)から、市役所1階受け付けの頭上に掲げられる金網でできた絵画。ドラクロアの「民衆を導く自由の女神」。縦約4m、幅約6mの超大作です。皆さん、ぜひご覧ください！



ミラノサローネならぬ

まつばらサローネを

デザインメッシュをやって良かったことの一つは「お付き合い」の仕方や幅が広がったことです。カタログひとつとっても、今までと作り方が変わりました。

最近はその変化の中から「まちをあげての展示会」ができませんか、という考えが浮かんできました。例えば「ミラノサローネ（※イタリアのミラノで行われる国際家具見本市）」のようなね。一つの場所や業種だけではなく、まち全体でさまざまな業種が出来る場を作る。点か面になって、空間を巻き込む。すると新しい発想も生まれやすい。金網が地場産業が松原のまち全体が、そんな風に発展していけばと思います。

松原金網事情。

アサダメッシュ株式会社

代表取締役 浅田英明さん

まるで絹のような！

アサダメッシュは、

簡単にい

うと「細

かい金網」を

作っています。

うちは代々続いた呉服屋

と河内木綿織りがルーツ。昔から織

物には造詣が深く、その技術が金網

織りへと移り変わりました。縦糸を

張って横糸を入れていく、原理は機

織りと全く一緒です。河内木綿が廃

れてからは、最初はザルや網戸など

をしていました。今でも、たまに「餅

焼き網ありますか？」なんて聞か

れることもありますかね。

最盛期に50〜60社あった金網

会社と差別化をはかるため、



特にニーズは無かったのですが一種の賭けで「細かい金網」を父親が進めたんです。すると、ひよんなことから「スクリーン印刷（※参照）をもっと精度の高いものになりたい」と声をかけていただいたんです。

スクリーン印刷に金網？

アサダメッシュがスクリーン印刷を手がけて、もう半世紀以上になります。意外と知られていないんですが、コカコーラやコロナビールの瓶のロゴなんかも、うちの金網でスクリーン印刷されてたんですよ。

従来のシルクやポリエステルのは、何度も印刷していくうちに伸びやすく、版ずれを起こしていました。電子部品などに印刷する場合それぞれは厳しい。そこで引つ張り強さと細



※スクリーン印刷

メッシュを張った枠に感光剤を塗り紫外線を当て版を作る方法。印刷部分はマスクをして露光させるため、その部分のみメッシュの目が詰まらず、網目からインクが染み、印刷できる原理。



かさを兼ねそろえた金網が適したんですね。細いと弱くなるのが普通ですがワイヤーメーカーと共同開発し、より強く細かい金網を作るのに成功しました。

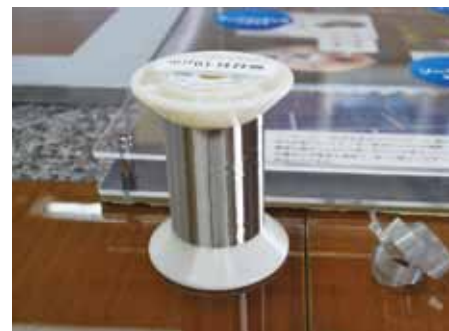
どのくらい細かいかというと、髪の毛の10分の1ほどでしょうか。一番細かいもので900メッシュになります。メッシュというのは、1インチ（2.54センチ）の中に何本ワイヤーが入るかということです。

この細さのワイヤーを扱うには、風や埃は厳禁。500メッシュくらいでも、一人前に扱えるまで10年近くかかる。職人技ですよ。

最近では、色んな用途が出てきて、太陽電池のパネルや、携帯のタッチパネル画面の配列線なんかも印刷しています。今まで電子部品は全面印刷で不要な部分を全て捨てていたんです。でもスクリーン印刷は必要な部分のみに印刷できるので、エコロジードしエコノミーなんです。

金網を医療へ！

これからは、医療用センサー部品などへの印刷も考えられています。



例えば、医療用ベッドの下にスクリーン印刷したセンサーを敷き詰めて患者さんの身体の負担を感じし自動的に寝返りをうたせたり。もっともつと松原の金網の可能性を広げたいですね。

日本で繋がる！

元々、私は阿保に生まれ、工場のある家で、機織りの音を子守歌代わりに育ちました。今、だんだんとその風景は失われてきています。海外の産業に押し出されてきている。

でも、そこで新しいアイデアを出し続けると、飯は食えない。チム・ジャパンで繋がり、助け合うところが日本の、そして松原の地場産業の生き残る道ではないでしょうか。

今回、取材させていただいて感じたのは、想像以上の金網の美しさと、それに携わる方々の熱意でした。

その視線は、金網だけでなく松原の地場産業、そして松原全てに注がれている。「衰退しつつある地場産業」と嘆かれている、でもその目は「絶対に諦めない」とまっすぐ松原の未来に向けられているのです。

皆さん「松原の金網」は、まだまだ進化しまっせ！

問合せ 秘書広報課

(☎) 3334・1550代表